運動部活動における目標設定、勝利志向性、意見の反映度の実態 並びにそれらが生徒の満足度に及ぼす影響

深見英一郎¹⁾ 岡澤 祥訓²⁾

Eiichiro Fukami¹ and Yoshinori Okazawa²: The influence of goal-setting, desire to win, and individual opinion on the satisfaction of students with athletic clubs. Japan J. Phys. Educ. Hlth. Sport Sci. 61: 781-796, December, 2016

Abstract : The purpose of this study was to analyze consciousness with regard to team/individual goal-setting, desire to win, and individual opinion in relation to the satisfaction of students with athletic clubs.

We conducted a questionnaire survey of athletic clubs to investigate 3 issues related to team goal-setting: a) whether the goals were set or not, b) who was responsible for deciding the goals, and c) whether the goals were shared or not. We also investigated 3 issues related to students' personal goal-setting: a) whether the goals were set or not, b) whether a concrete plan for goal achievement was formulated or not, and c) whether an effort was made to accomplish these aims. We also investigated students' desire to win, the degree of reflection of individual student opinion, and satisfaction gained from applying individual aims using a survey of athletic club activity devised by the Japanese Ministry of Education (1997).

The study involved 4,104 students at 292 athletic clubs in 29 junior high schools, and 3,944 students at 249 athletic clubs in 23 high schools (8,048 students in total). The response rate was 69.9%.

The main results were as follows:

- 1) Most of the students had their own personal goals, made concrete plans for achieving them, and made an effort to accomplish their aims. Also, team goals were set, and these were decided and shared by all students.
- 2) Most of the students recognized that their teams were victory-oriented. In addition, they considered that coaches were positively responsive to students' opinions during practice and games.
- 3) Therefore, most students had a high level of satisfaction with their athletic clubs.

Key words : questionnaire survey, students' consciousness, personal goals, team goals

キーワード : 質問紙調査, 生徒の意識, 個人目標, チーム目標

1. 目 的

運動部活動は、学習指導要領にその意義と留意点等が記載され（文部科学省，2012），学校教育

活動の一環として大きな役割を果たしている。ここでは多くの教師が授業や生徒指導を遂行する傍ら、顧問教師となって運動部活動の指導と運営に携わっている。その結果、ほぼすべての中学・高等学校に運動部活動が設置され、全教師の半分以

1) 早稲田大学スポーツ科学学術院
〒359-1192 埼玉県所沢市三ヶ島 2-579-15
2) 大阪体育大学教育学部
〒590-0496 大阪府泉南郡熊取町朝代台 1-1
連絡先 深見英一郎

1. Faculty of Sport Science, Waseda University
2-579-15 Mikajima, Tokorozawa, Saitama 359-1192
2. School of Education, Osaka University of Health and Sport Sciences
1-1 Asashirodai, Kumatori-cho, Sennan-gun Osaka
590-0496
Corresponding author eiichiro@waseda.jp

上が顧問に就き（文部科学省，2002），6割以上の中学生と4割以上の高校生が運動部活動に加入している状況にある（文部科学省，2015）。運動部活動では，異学年の同好の士や指導者など様々な人間と関わり合い，その中で責任感，協調性，思いやりの心などを身につけることが期待されている。また，日常的に自己選択や自己決定が求められることで自己実現の基礎を培うことができ，様々な体験を通して社会性や行動力などを身につけることが期待されている（教育新聞，2011）。

文部科学省（2014）は，運動部活動の指導のあり方について，「生徒との意見交換等を通じて……生徒の主体性を尊重しつつ，各活動の目標，指導の方針を検討，設定すること」，「部活動の方向性及び各自の取組姿勢，試合での作戦や練習にかかる事柄等について，生徒同士で主体的に筋道を立てて話し合い」をさせることと指摘している。なぜ，運動部活動において生徒の主体性を尊重する必要があるのか。Danish et al.（1993）は，自分で考えて目標を設定することが人間の行動を動機づける力の源であると指摘している。目標設定は，今，自分に足りないものを明確にし，努力の方向性を明らかにすることである。一般に，スポーツ場面ではチームや個人の目標が掲げられ，その目標達成に向けた計画の立案や活動が遂行される。生徒は，自分やチームの目標を設定することで，練習に取り組む意識や行動が変わり，目標の達成に近づくことができる。また，上手くいかないうちや望んでいた結果がなかなか出ない時でも燃え尽きたりせず，気持ちを切り替えて工夫や努力をすることができるのである（岡沢，2001；上野，2006）。

それでは，実際の運動部活動において指導者の主導性はどの程度発揮され，生徒が自分たちで考えたり意思決定したりする機会はどの程度保障されているだろうか。たとえば，中学校の運動部指導者の管理行動を調査した藤田・吉田（2010）は，競技経験年数が長く，より高い競技レベルを持つ指導者は，そうでない指導者と比較してより有意に積極的な管理行動を行っている」と指摘して

いる。また，高校の陸上部員を対象とした指導者の主導性に関する調査（佐藤・長堂，1995；鶴山，2010）では，男子や上級生は自分たちで主体的に活動することを望む反面，女子や下級生は指導者の強い主導性を期待する傾向がみられたという。さらに，中学校では指導者が独断で練習メニューや試合メンバーを決める傾向がみられ，また生徒も自分たちで決められず指導者に決めてもらいたいと考えているとの報告（丸山，2013）もみられる。これらの結果から，運動部活動の指導場面において指導者が強いリーダーシップを発揮することで生徒の主体性が尊重されないケースや，生徒自身も指導者の主導性に依存する傾向がみられた。しかしながら，運動部活動における指導者の主導性の発揮のしかたに着目した研究自体が少なく（倉藤ほか，2011；桑野ほか，2014），対象とした競技種目にも偏りがみられ，生徒の発達段階に応じた指導のあり方については十分に検討できていないことが明らかになった。このことに関して，中澤（2015）は運動部活動の成立要件が生徒の意思よりも学校と教師の支援に大きく左右されるため，運動部活動における生徒の意識や行動，また中学生と高校生の取り組み方の違いについて十分に検討がなされていないと指摘している。今日では，顧問の専門性や外部指導者の問題，また保護者対応や土日勤務などの問題（朝日新聞，2016a，2016b；佐藤，2013；友添，2013）が山積する中で，生徒の自治活動としての運動部活動を実践している例もある。制野（2013）は自身が受け持つ中学校野球部において，練習計画・内容の決定だけでなく試合においても新たに試したいことやオーダーの組み方，ゲーム中の采配まで生徒に交代で担当させている。生徒には徹底的に考えることを求め，顧問はより高い次元の生徒の自治が発揮されるように，そのプロセスを整えるコーディネーターの役割に徹するという。これまで日本のスポーツ指導では，どのレベルや年代で何回勝たせたかが指導者の力量として評価される傾向がみられたが，生徒は負けた結果からも多くのことを学び教訓を得ており，必ずしも勝たせた指導者だけがその生徒を勝利に導いたとは

言えないのである(勝田, 2000). 伊藤(2013)は, Jean and Wade(2009)による優れたコーチングの考察結果をふまえて, 次のように指摘している. 優れたコーチングの条件とは, スキルを向上させたり試合で勝利に導くといった①有能さ(Competence), それによって選手に②自信を与え(Confidence), 選手がパフォーマンスを最大限発揮できるように③周囲の人間関係を構築し(Connection), さらに④人間的な成長を促す(Character)といった4つの4Csが重要であり, 選手が収めた競技成績の結果のみで判断してはならないと指摘している. 西島(2006, 2013)は, 「先生方は『大人は完璧で, 生徒は未熟で指導すべき』とか『生徒たちに自治能力が育っていないから任せられない』と思っていないか. 試しに生徒たちに運動部活動の運営を任せたら, きっと生徒たちは自分たちでもっとできるように成長できるはず」と指摘している.

それでは, 今日の運動部活動において, 実際にはどのくらいの中・高校生が, 自分たちでチームの目標を設定し, 共有できているか. 運動部活動では, 様々な目的や目標を持った異学年の生徒が一堂に会して, 年間を通じて非常に長い時間をチームで活動する. そのため, たとえ個人の目標はばらばらでも, チームの目標がチーム全員で統一され, 共有されることが望ましい. また, 個人の目標についても, 個人/集団種目にかかわらず, すべての生徒がチームの目標とは別に, 個人の目標をもち, その達成に向けて計画を立てて取り組んでいることが望ましいと考えられる. さらに, チームが目指す方向性について, 文部科学省(2014)は, 「……勝つことのみを目指すことのないよう, 生徒が生涯にわたってスポーツに親しむ基礎を育むこと, 発達の段階に応じた心身の成長を促す」ことと指摘している. このように勝つことを目指すことは重要であるが, それ以上に生涯スポーツの基礎を育成することを重視している. 果たして生徒は運動部活動において, 勝利することをどの程度, 重視して取り組んでいるのか. 加えて, 練習や試合において生徒の意見はどの程度反映されているのか. 先述したように, 練

習や試合に関わる事項については生徒同士で主体的に話し合わせ, できるだけ彼らの意見を取り入れ, 生徒の主体性を尊重することが望ましいと考えられる.

また, これらの検討課題に関して生徒の発達段階の違いや個人/集団種目の違いによって, その実態にどのような差異がみられるかについても未だ明らかにされていない. 一般的に考えれば, 中学生と高校生では, 生徒の人間的な成熟度が異なるため, 部のあり方や方針を決定したり協同的な活動を遂行したりする能力は, 高校生の方が高いのではないかと予想される. そのため, 中学生では指導者がある程度, 主導的にチームの目標や練習内容を設定して取り組ませている一方で, 高校生では自分たちで目標や練習内容を考えさせ, 生徒の主体的活動を一定程度保障していると考えられる. さらに, 個人種目と集団種目では, 個人種目の生徒の方が, 自身の明確な目標を立て達成に向けて計画的に取り組んでいる割合が高い一方で, 集団種目の生徒の方が, 自分たちでチームの目標を決定し, チーム全員で共有している割合が高いと考えられる.

そこで本研究では, チーム/個人の目標設定のしかた, チームの勝利志向性, 生徒の意見の反映度それぞれの実態を明らかにすること, またそれらの実態と生徒の満足度との関係について分析しようとした. 具体的には, (1)チームの目標に関わって, 誰が決定し, チームでどの程度共有できているか. (2)個人の目標に関わって, どのくらいの生徒が目標を立てて, 目標達成に向けて実際に行動できているか. (3)所属する運動部は勝つことをどの程度, 重視しているか. (4)練習や試合において, 生徒の意見はどの程度, 反映されているか, についてそれぞれ分析する. また, それらが生徒の発達段階及び個人/集団種目の違いによって特徴がみられるかを明らかにする. さらに, それらの実態と運動部活動に対する生徒の満足度との関係を分析することによって, 生徒にとって望ましい運動部活動のあり方について明らかにしようとした.

2. 方 法

1) 調査の対象と実施時期

表1は、対象とした中学校及び高等学校の運動部活動の数と生徒数を示したものである。全国11府県の中中学校29校、高等学校23校の運動部、それぞれ中学校292部（個人種目164部、集団種目128部）とその生徒4104名（個人種目2043名、集団種目2061名）、高等学校249部（個人種目136部、集団種目113部）とその生徒3944名（個人種目1618名、集団種目2326名）、合計541部8048名を対象とした^{注1)}。学校種別に運動種目別生徒数の差があるかについて連関性を見るために χ^2 検定を行ったところ有意であった（ $\chi^2(1) =$

110.005, $p < .001$, $\phi = .117$)。この結果と残差から、高校生は集団種目が多いと解釈された。本調査は、2014年9月—2014年12月にかけて行った。

2) 調査の手続き

アンケート調査を実施するにあたり、事前に各学校の学校長及び保健体育主任にアンケート内容を確認してもらい、許可が得られた学校に対してのみ調査用紙を送付した。全国11府県の中中学校35校、高等学校25校に、それぞれ6040通、5480通、計11520通のアンケート用紙を送付した結果、中学校29校、高等学校23校から生徒8048名（回収率69.9%）の回答が得られた。調査は、各運動部の指導者を通じて生徒に回答してもらった^{注2)}。

表1 対象とした中学校及び高等学校の運動部活動の数と生徒数

	中学校		高等学校		全 体	
	部	生徒	部	生徒	部	生徒
個人種目	164	2043	136	1618	300	3661
集団種目	128	2061	113	2326	241	4387
計	292	4104	249	3944	541	8048

3) 運動部活動への取り組みに関する調査票

表2は、運動部活動への取り組みに関する調査票を示したものである。この調査票は、(1)チームの目標設定、(2)個人の目標設定、(3)チームの勝利志向性、(4)生徒の意見の反映度、(5)生徒の満足度の5観点について調査するものである。

(1) チームの目標設定は、a) 目標の有無、b) 決定者、c) 共有状況について調査した。また、

表2 運動部活動への取り組みに関する調査票

-
- 1) 所属している運動部にはチームが目指す目標はありますか（ある/ない）
 - 1-1) 「チームの目標がある」と回答した方へ。その目標は誰が決めましたか
指導者/指導者と一部の生徒（主将、副主将など）/指導者とすべての生徒/すべての生徒
 - 1-2) 「チームの目標がある」と回答した方へ。その目標はチームで共有できているか
すべての生徒が共有している/一部の生徒が共有していない/ほとんどの生徒が共有していない
 - 2) 所属している運動部において個人の目標を設定していますか（ある/ない）
 - 2-1) 「個人の目標がある」と回答した方へ。その目標達成に向けた計画はありますか
具体的な計画がある/なんとなく計画はある/計画はない
 - 2-2) 「個人の目標がある」と回答した方へ。その目標達成に向けて努力できているか
十分に努力できている/努力できている/あまり努力していない/ほとんど努力していない
 - 3) 所属している運動部は何を目指して活動していますか（勝利志向と楽しみ志向）
徹底して勝つ/ある程度勝つことを中心にしながら楽しむ/
みんなで楽しむことを中心とし、できれば勝つ/とことん楽しむ
 - 4) 所属している運動部の練習や試合に生徒の意見は反映されていると思いますか。
とても反映されている/反映されている/あまり反映されていない/ほとんど反映されていない
 - 5) 運動部活動に対する満足度（部活動は楽しいか）
とても楽しい/どちらかという楽しい/どちらかという苦しい/とても苦しい
-

b) 決定者については、①指導者、②指導者と一部の生徒（主将、副主将など）、③指導者とすべての生徒、④すべての生徒という4つの選択肢、さらに c) 共有状況については、①すべての生徒が共有している、②一部の生徒が共有していない、③ほとんどの生徒が共有していない、という3つの選択肢をそれぞれ用意した。

(2) 個人の目標設定は、a) 目標の有無、b) 達成計画、c) 達成努力について調査した。また、b) 達成計画については、①具体的な計画がある、②なんとなく計画はある、③計画はない、という3つの選択肢、さらに c) 達成努力については、①十分に努力できている、②努力できている、③あまり努力していない、④ほとんど努力していない、という4つの選択肢をそれぞれ用意した。

(3) チームの勝利志向性については、a) 徹底して勝つ、b) ある程度勝つことを中心にしながら楽しむ、c) みんなで楽しむことを中心とし、できれば勝つ、d) とことん楽しむ、という4つの選択肢を用意した。

(4) 生徒の意見の反映度については、a) とても反映されている、b) 反映されている、c) あまり反映されていない、d) ほとんど反映されていない、という4つの選択肢を用意した。

(5) 生徒の満足度については、a) とても楽しい、b) どちらかというと楽しい、c) どちらかというと苦しい、d) とても苦しい、という4つの選択肢を用意した。

また、生徒の属性として、(1)学校種（中学生/高校生）及び(2)運動種目（個人/集団種目）の違いによって、上記した調査内容に差異や特徴がみられるかを検討した。

なお、チームの勝利志向性、生徒の意見の反映度、生徒の満足度という3つの質問内容は、文部省（1997）の「運動部活動の在り方に関する調査研究報告」で使用された質問項目及び選択肢を採用した。このうち、(5) 生徒の満足度については、文部省（1997）の調査研究報告に倣って、「楽しい」という評価を「満足度」として捉えた。当然、楽しさと満足度の高さは完全に対応するものではないが、複数の先行研究から運動・スポー

ツに対する生徒の満足度を規定する主要因の1つが「楽しさ」であることが報告されていることから、文部省（1997）の評価基準をそのまま採用した^{注3)}。

4) 統計解析の方法

統計解析の手続きは IBM SPSS Statistics 20 を用いて行った。期待度数と測定値との間にどの程度の差異が認められるかを推測するために Pearson の χ^2 検定及び残差分析を行った^{注4)}。また、 χ^2 検定の結果の解釈では、効果量として ϕ 係数及び Cramer's V を求め有意性と併せて確認した。効果量は0.0—1.0の範囲をとり、大きさの目安は、「ほとんど関連性はない」(ϕ , Cramer's V < ± 0.2)、「関連性がある」(ϕ , Cramer's V > ± 0.4)、「強い関連性がある」(ϕ , Cramer's V > ± 0.7)とした。さらに、生徒の満足度が各測定項目の割合とどのように関係しているかを記述するためにカテゴリー回帰分析を使用した。

3. 結果と考察

1) チームの目標設定

表3は、チーム目標の有無、決定者、共有状況に関する生徒の回答を全体の割合、運動種目別及び学校種別で分析したものである。その結果、チームの目標について、全体で86.7%（6978名）の生徒が「目標がある」と回答した。 χ^2 検定の結果、運動種目別 ($\chi^2(1) = 402.79$, $p < .001$, $\phi = -.220$)、学校種別 ($\chi^2(1) = 10.09$, $p < .01$, $\phi = -.038$) それぞれにおいて有意差が認められた。効果量の値から、運動種目別にみたチーム目標の有無間には弱い関連性がみられ、人数の偏りが確認された^{注5)}。残差分析の結果、運動種目別では、個人種目よりも集団種目で ($Z = \pm 20.1$, $p < .01$)、学校種別では中学生よりも高校生が ($Z = \pm 3.2$, $p < .01$)、それぞれ「目標がある」と回答した割合が有意に高かった。

次に、チーム目標の決定者では、「すべての生徒」で決定した割合が45.3%（3162名）と最も高く、次いで「指導者とすべての生徒」は36.3%

表3 運動種目/学校種別にみたチーム目標の有無, 決定者, 共有状況

		全体の割合	運動種目		残差分析	χ^2 値 (df)	学校種		残差分析	χ^2 値 (df)
			個人 度数	集団 (%)			中学生 度数	高校生 (%)		
チームの目標	目標がある	86.7% (6978)	2869 (78.4%)	4109 (93.6%)	± 20.1 **	402.79 *** (1)	3510 (85.5%)	3468 (87.9%)	± 3.2 **	10.09 ** (1)
	目標がない	13.3% (1070)	791 (21.6%)	279 (6.4%)	± 20.1 **		594 (14.5%)	476 (12.1%)	± 3.2 **	
	合 計	100% (8048)	3660 (100%)	4388 (100%)			4104 (100%)	3944 (100%)		
決定者	指導者	9.0% (630)	366 (12.8%)	264 (6.4%)	± 9.1 **	114.52 *** (3)	314 (8.9%)	316 (9.1%)	± 0.2	123.74 *** (3)
	指導者と一部の生徒 (主将, 副主将など)	9.4% (657)	326 (11.4%)	331 (8.1%)	± 4.7 **		300 (8.5%)	357 (10.3%)	± 2.5 *	
	指導者とすべての生徒	36.3% (2529)	953 (33.2%)	1576 (38.4%)	± 4.4 **		1084 (30.9%)	1445 (41.7%)	± 9.4 **	
	すべての生徒	45.3% (3162)	1224 (42.7%)	1938 (47.2%)	± 3.7 **		1812 (51.6%)	1350 (38.9%)	± 10.7 **	
	合 計	100% (6978)	2869 (100%)	4109 (100%)			3510 (100%)	3468 (100%)		
共有状況	すべての生徒が共有している	77.5% (5410)	2130 (74.2%)	3280 (79.8%)	± 5.5 **	31.71 *** (2)	2663 (75.9%)	2747 (79.2%)	± 3.3 **	15.52 *** (2)
	一部の生徒が共有していない	19.3% (1349)	644 (22.4%)	705 (17.2%)	± 5.5 **		743 (21.2%)	606 (17.5%)	± 3.9 **	
	ほとんどの生徒が共有していない	3.2% (219)	95 (3.3%)	124 (3.0%)	± 0.7		104 (3.0%)	115 (3.3%)	± 0.8	
	合 計	100% (6978)	2869 (100%)	4109 (100%)			3510 (100%)	3468 (100%)		

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

(2529名)であり, 合わせて8割以上の生徒がチーム目標の決定にすべての生徒が関与していたと回答した. χ^2 検定の結果, 運動種目別 ($\chi^2(3) = 114.52$, $p < .001$, Cramer's $V = .134$), 学校種別 ($\chi^2(3) = 123.74$, $p < .001$, Cramer's $V = .132$) それぞれにおいて有意差が認められた. 残差分析の結果, 運動種目別では, 集団種目よりも個人種目で「指導者」($Z = \pm 9.1$, $p < .01$) 及び「指導者と一部の生徒」($Z = \pm 4.7$, $p < .01$) が決定したと回答した割合が有意に高かった. 反対に, 集団種目は個人種目よりも, 「指導者とすべての生徒」($Z = \pm 4.4$, $p < .01$) 及び「すべての生徒」($Z = \pm 3.7$, $p < .01$) で決定したと回答した割合が有意に高かった. また学校種別では, 中学生は高校生よりも「すべての生徒」($Z = \pm 10.7$, $p < .01$) で決

定したと回答した割合が有意に高かった. 反対に, 高校生は中学生よりも「指導者と一部の生徒」($Z = \pm 2.5$, $p < .05$) 及び「指導者とすべての生徒」($Z = \pm 9.4$, $p < .01$) で決定したと回答した割合が有意に高かった.

これらの結果から, チーム目標の決定に際して, 個人種目では指導者の主導性がより強く発揮されており, 逆に集団種目及び中学生では生徒の主体性が十分に尊重されていることが明らかになった. また, 中学生に比して高校生では, チームの目標決定に関わって, 指導者が大きく関与しており, 影響力が強いことが示された.

さらに, チーム目標の共有状況では, 「すべての生徒が共有している」と回答した割合が77.5% (5410名)と最も高く, 一方で「一部の生徒が共

有していない」は19.3% (1349名), 「ほとんどの生徒が共有していない」は3.2% (219名) と回答した割合は低かった. χ^2 検定の結果, 運動種目別 ($\chi^2(2) = 31.71, p < .001$, Cramer's $V = .068$), 学校種別 ($\chi^2(2) = 15.52, p < .001$, Cramer's $V = .048$) それぞれにおいて有意差が認められた. 残差分析の結果, 運動種目別では, 集団種目は個人種目よりも ($Z = \pm 5.5, p < .01$), 学校種別では高校生は中学生よりも ($Z = \pm 3.3, p < .01$) 「すべての生徒が共有している」と回答した割合がそれぞれ有意に高かった. 反対に, 個人種目 ($Z = \pm 5.5, p < .01$) 及び中学生 ($Z = \pm 3.9, p < .01$) では「一部の生徒が共有していない」と回答した割合が有意に高かった. これらの結果から, チームの目標は, 集団種目及び高校生では目標がある割合だけでなく, すべての生徒が共有している割合に関しても個人種目及び中学生を上回っていることが明らかになった. 集団種目では, 普段からチームで活動し仲間と協力してパフォーマンスを発揮する場面が多いため, 個人種目よりも集団の凝集性が強く, チームで共通の目標を設定しようという意識が高いと考えられる. また高校生は, 中学生よりも自分たちで話し合っ

2) 個人の目標設定

表4は, 個人目標の有無, 達成計画, 達成努力に関する生徒の回答を全体の割合, 運動種目別及び学校種別で分析したものである. その結果, 個人の「目標がある」と回答した割合は92.8% (7468名) で, ほとんどの生徒が個人目標を設定して取り組んでいることが明らかになった. χ^2 検定の結果, 運動種目別において有意差が認められ ($\chi^2(1) = 13.40, p < .001, \phi = -.043$), 残差分

析の結果, 集団種目は個人種目よりも, 個人の「目標がある」と回答した割合が有意に高かった ($Z = \pm 3.7, p < .01$). 個人種目において, 個人の目標があると回答した割合が低かったのは, 表3において個人種目ではチームの目標設定に関わって指導者の関与が大きいことが影響していたと考えられる.

次に, 個人目標の達成計画では, 「なんとなく計画はある」と回答した割合が58.4% (4360名) と最も高く, 次いで「具体的な計画がある」と回答した割合が35.1% (2620名) であり, 「計画はない」と回答した割合は1割未満と少なかった. χ^2 検定の結果, 運動種目別において有意差が認められ ($\chi^2(2) = 10.01, p < .01$, Cramer's $V = .036$), 残差分析の結果, 「具体的な計画がある」と回答した割合は, 個人種目よりも集団種目の生徒が ($Z = \pm 3.1, p < .01$), 反対に「なんとなく計画はある」と回答した割合は, 集団種目よりも個人種目の生徒が ($Z = \pm 2.4, p < .01$) それぞれ有意に高かった.

さらに, 個人目標の達成努力では, 「努力できている」と回答した割合が71.6% (5345名) と最も高く, 次いで「十分に努力できている」と回答した割合が14.7% (1099名) と合わせて85%以上の生徒は個人目標の達成努力ができていると回答した. χ^2 検定の結果, 学校種別において有意差が認められ ($\chi^2(3) = 17.80, p < .001$, Cramer's $V = .049$), 残差分析の結果, 「十分に努力できている」と回答した割合は, 高校生よりも中学生が有意に高く ($Z = \pm 3.9, p < .01$), また「努力できている」と回答した割合は, 中学生よりも高校生が有意に高かった ($Z = \pm 3.7, p < .01$).

3) チームの勝利志向性, 生徒の意見の反映度, 生徒の満足度

(1) チームの勝利志向性

表5は, チームの勝利志向性に対する生徒の意識を全体の割合, 運動種目別及び学校種別で分析したものである. その結果, 全体でみると, 「徹底して勝つ」と回答した割合が49.1% (3951名) と最も高く, 次いで「ある程度勝つことを中

表4 運動種目/学校種別にみた個人目標の有無, 達成計画, 達成努力

		全体の割合	運動種目		残差分析	χ^2 値 (df)	学校種		残差分析	χ^2 値 (df)
			個人 度数 (%)	集団 度数 (%)			中学生 度数 (%)	高校生 度数 (%)		
個人の目標	目標がある	92.8% (7468)	3354 (91.6%)	4114 (93.7%)	± 3.7 **	13.40 *** (1)	3804 (92.6%)	3664 (92.9%)	± 0.4	0.14 (1)
	目標がない	7.2% (580)	306 (8.4%)	274 (6.2%)	± 3.7 **		300 (7.3%)	280 (7.1%)	± 0.4	
	合 計	100% (8048)	3660 (100%)	4388 (100%)			4104 (100%)	3944 (100%)		
達成計画	具体的な計画がある	35.1% (2620)	1113 (33.2%)	1507 (36.6%)	± 3.1 **	10.01 ** (2)	1312 (34.5%)	1308 (35.7%)	± 1.1	1.28 (2)
	なんとなく計画はある	58.4% (4360)	2008 (59.9%)	2352 (57.2%)	± 2.4 *		2236 (58.8%)	2124 (58.0%)	± 0.8	
	計画はない	6.5% (485)	231 (6.9%)	254 (6.2%)	± 1.2		253 (6.7%)	232 (6.3%)	± 0.6	
	合 計	100% (7465)	3352 (100%)	4113 (100%)			3801 (100%)	3664 (100%)		
達成努力	十分に努力できている	14.7% (1099)	500 (14.9%)	599 (14.6%)	± 0.4	1.17 (3)	620 (16.3%)	479 (13.1%)	± 3.9 **	17.80 *** (3)
	努力できている	71.6% (5345)	2404 (71.7%)	2941 (71.5%)	± 0.2		2650 (69.7%)	2695 (73.6%)	± 3.7 **	
	あまり努力していない	13.2% (985)	430 (12.8%)	555 (13.5%)	± 0.8		511 (13.4%)	474 (12.9%)	± 0.6	
	ほとんど努力していない	0.5% (36)	18 (0.5%)	18 (0.4%)	± 0.6		20 (0.5%)	16 (0.4%)	± 0.6	
	合 計	100% (7465)	3352 (100%)	4113 (100%)			3801 (100%)	3664 (100%)		

*** p < .001, ** p < .01, * p < .05

表5 運動種目/学校種別にみたチームの勝利志向性に対する生徒の意識

チームの勝利志向性	全体の割合	運動種目		残差分析	χ^2 値 (df)	学校種		残差分析	χ^2 値 (df)
		個人 度数	集団 (%)			中学生 度数	高校生 (%)		
徹底して勝つ	49.1% (3951)	1429 (39.0%)	2522 (57.5%)	± 16.5 **	294.04 *** (3)	1961 (47.8%)	1990 (50.5%)	± 2.4 *	7.66 * (3)
ある程度勝つことを中心に楽しむ	39.7% (3193)	1679 (45.9%)	1514 (34.5%)	± 10.4 **		1688 (41.1%)	1505 (38.2%)	± 2.7 **	
みんなで楽しむことを中心にできれば勝つ	9.2% (741)	444 (12.1%)	297 (6.8%)	± 8.3 **		371 (9.0%)	370 (9.4%)	± 0.5	
とことん楽しむ	2.0% (161)	107 (2.9%)	54 (1.2%)	± 5.4 **		82 (2.0%)	79 (2.0%)	± 0.0	
不 明	(2)	1	1			2	0		
合 計	100% (8048)	3660 (100%)	4388 (100%)			4104 (100%)	3944 (100%)		

*** p < .001, ** p < .01, * p < .05

心に楽しむ」と回答した割合が39.7% (3193名) といったように9割近くの生徒はチームの勝利を目指すことを中心に考えており、「楽しむ」ことを中心に考える生徒は少なかった。文部省(1997)の調査では、「ある程度勝つことを中心に楽しむ」と回答した割合(中学生56.5%, 高校生62.6%)が最も高く、次いで「みんなで楽しむことを中心にできれば勝つ」という回答(中学生21.2%, 高校生18.8%)の順であり、「徹底して勝つ」と回答した割合(中学生11.8%, 高校生12.1%)は低かったことから、本研究の対象者がチームの勝利をより重視していることが明らかになった。 χ^2 検定の結果、運動種目別 ($\chi^2(3) = 294.04, p < .001, \text{Cramer's } V = .165$), 学校種別 ($\chi^2(3) = 7.66, p < .05, \text{Cramer's } V = .032$) それぞれにおいて有意差が認められた。残差分析の結果、「徹底して勝つ」と回答した割合は、個人種目よりも集団種目の方 ($Z = \pm 16.5, p < .01$) が、また中学生よりも高校生の方 ($Z = \pm 2.4, p < .05$) がそれぞれ有意に高かった。反対に、「ある程度勝つことを中心に楽しむ」と回答した割合は、集団種目よりも個人種目の方 ($Z = \pm 10.4, p < .01$) が、高校生よりも中学生の方 ($Z = \pm 2.7, p < .05$) がそれぞれ有意に高かった。また、「みんなで楽しむことを中心にできれば勝つ」($Z = \pm 8.3, p < .01$), 「とことん楽しむ」($Z = \pm 5.4, p < .01$)

それぞれに回答した割合は、集団種目よりも個人種目が有意に高かった。この結果から、集団種目と比べて個人種目の生徒は楽しむことを重視する傾向が明らかになった。

(2) 生徒の意見の反映度

表6は、練習や試合における生徒の意見の反映度について全体の割合、運動種目別及び学校種別で分析したものである。その結果、全体でみると「反映されている」と回答した割合が59.4% (4783名) と最も高く、次いで「とても反映されている」が20.6% (1657名) であり、多くの生徒が練習や試合において自分たちの意見が反映されていると回答した。学校種別でみると、中学生の78.8% (3238名), 高校生の81.2% (3202名) が(「とても反映されている」を含めて) 反映されていると回答し、文部省(1997)の調査とほぼ同様の結果が認められた^{注6)}。この結果から、多くの運動部活動では生徒の考えや意見が取り入れられ、生徒の主体性が尊重されていることが推察された。

χ^2 検定の結果、運動種目別 ($\chi^2(3) = 15.68, p < .01, \text{Cramer's } V = .003$), 学校種別 ($\chi^2(3) = 7.86, p < .05, \text{Cramer's } V = .029$) それぞれにおいて有意差が認められた。残差分析の結果、「とても反映されている」と回答した割合は、個人種目よりも集団種目の方が有意に高かった ($Z = \pm$

表6 運動種目/学校種別にみた生徒の意見の反映度

生徒の意見の反映度	全体の割合	運動種目		残差分析	χ^2 値 (df)	学校種		残差分析	χ^2 値 (df)
		個人 度数 (%)	集団 度数 (%)			中学生 度数 (%)	高校生 度数 (%)		
とても反映されている	20.6% (1657)	695 (19.0%)	962 (21.9%)	± 3.2 **	15.68 (3) **	851 (20.7%)	806 (20.4%)	± 0.3	7.86 (3) *
反映されている	59.4% (4783)	2242 (61.3%)	2541 (57.9%)	± 3.1 **		2387 (58.1%)	2396 (60.8%)	± 2.4 *	
あまり反映されていない	17.3% (1389)	612 (16.7%)	777 (17.7%)	± 1.2		745 (18.2%)	644 (16.3%)	± 2.2 *	
ほとんど反映されていない	2.7% (219)	111 (3.0%)	108 (2.5%)	± 1.6		121 (2.9%)	98 (2.5%)	± 1.3	
合 計	100% (8048)	3660 (100%)	4388 (100%)			4104 (100%)	3944 (100%)		

** $p < .01$, * $p < .05$

3.2, $p < .01$) が, 「反映されている」と回答した割合は, 集団種目よりも個人種目の方が有意に高かった ($Z = \pm 3.1, p < .01$). 他方で, 中学生は高校生よりも「反映されている」と回答した割合が有意に低く ($Z = \pm 2.4, p < .05$), 逆に「あまり反映されていない」と回答した割合が有意に高かった ($Z = \pm 2.2, p < .05$). この結果から, 高校生と比較して中学生の運動部活動では, 練習や試合に関わって生徒の考えや意見が取り入れられていないことが示された.

(3) 運動部活動に対する生徒の満足度

表7は, 運動部活動に対する生徒の満足度について全体の割合, 運動種目別及び学校種別で分析したものである. その結果, 全体では「とても楽しい」と回答した割合が59.7% (4802名) と最も高く, 次いで「どちらかという楽しい」と回答した割合は32.9% (2648名) であり, 9割以上の生徒が運動部活動を楽しんでいると回答していた.

学校種別でみると, 中学生の93.0% (3818名), 高校生の92.1% (3632名) が運動部活動を楽しんでいると回答していた. 文部省 (1997) の調査では, 中学生の83.4%, 高校生の83.8%が (「とても/どちらかという楽しい」を含めて) 楽しいと回答していたことから, 本研究で対象となった生徒は, 運動部活動に対する満足度の高い生徒が多いことが示された. χ^2 検定の結果, 運動種

目別 ($\chi^2(3) = 17.29, p < .01$, Cramer's $V = .016$), 学校種別 ($\chi^2(3) = 7.43, p < .05$, Cramer's $V = .018$) それぞれにおいて有意差が認められた. 残差分析の結果, 集団種目は個人種目よりも ($Z = \pm 2.5, p < .05$), 中学生は高校生よりも ($Z = \pm 2.5, p < .05$) 「とても楽しい」と回答した割合が有意に高かった. また, 「どちらかという楽しい」と回答した割合もまた, 個人種目よりも集団種目の方が有意に高かった ($Z = \pm 2.4, p < .05$). この結果から, 個人種目と比較して集団種目は, 生徒にとって楽しいだけではなく, 苦しさも味わえる種目であることが示唆された.

4) 目標の有無, 生徒の属性, 生徒の意見の反映度, チームの勝利志向性と生徒の満足度との関係

ここまで運動部活動におけるチーム/個人の目標設定, チームの勝利志向性, 生徒の意見の反映度さらには生徒の満足度について分析した. ここでは, チーム/個人の目標設定, チームの勝利志向性, 生徒の意見の反映度をそれぞれ独立変数として設定し, そのうちどれが運動部活動に対する生徒の満足度に影響を及ぼすかを検討した.

(1) 目標の有無, 生徒の属性, 生徒の意見の反映度, チームの勝利志向性と生徒の満足度との関係

表7 運動種目/学校種別にみた運動部活動に対する生徒の満足度

生徒の満足度	全体の割合	運動種目		残差分析	χ^2 値 (df)	学校種		残差分析	χ^2 値 (df)
		個人 度数 (%)	集団 度数 (%)			中学生 度数 (%)	高校生 度数 (%)		
とても楽しい	59.7% (4802)	2130 (58.2%)	2672 (60.9%)	± 2.5 *	17.29 ** (3)	2504 (61.0%)	2298 (58.3%)	± 2.5 *	7.43 * (3)
どちらかという楽しい	32.9% (2648)	1280 (35.0%)	1368 (31.2%)	± 3.6 **		1314 (32.0%)	1334 (33.8%)	± 1.7	
どちらかという苦しい	6.3% (508)	205 (5.6%)	303 (6.9%)	± 2.4 *		246 (6.0%)	262 (6.6%)	± 1.2	
とても苦しい	1.1% (90)	45 (1.2%)	45 (1.0%)	± 0.9		40 (1.0%)	50 (1.3%)	± 1.2	
合 計	100% (8048)	3660 (100%)	4388 (100%)			4104 (100%)	3944 (100%)		

** $p < .01$, * $p < .05$

表8は、運動部活動に対する生徒の満足度を従属変数、他の各測定項目を独立変数として重回帰分析（カテゴリカル回帰）を行った結果を示したものである。その結果、標準偏回帰係数 β 値から、生徒の意見の反映度（ $\beta=.193, p<.001$ ）、個人目標の有無（ $\beta=.103, p<.001$ ）、チームの勝利志向性（ $\beta=.085, p<.001$ ）は、生徒の満足度に有意な正の影響を及ぼしていることが認められ

た。チーム目標の有無では有意な影響はみられなかった一方で^{注7)}、個人目標の有無が生徒の満足度に影響を与えていることが示された。しかしながら、生徒の満足度の決定係数 R^2 は有意ではあったが比較的低い値であった。

さらに、生徒の満足度に対して有意な正の影響を及ぼした個人目標の有無、チームの勝利志向性、生徒の意見の反映度について、満足度の高低に影響する各変数の期待度数と測定値との間でどの程度の差異がみられるかを明らかにするために χ^2 検定を行った。ちなみに、生徒の満足度を明確に区分するために、「とても楽しい」と「どちらかといえば楽しい」を「楽しい」に、また「とても苦しい」と「どちらかといえば苦しい」を「苦しい」にそれぞれまとめて二件法で分析した。

(2) 個人の目標設定と生徒の満足度との関係

表9は、個人目標の有無、達成計画、達成努力と生徒の満足度との関係を分析したものである。まず、個人目標の有無による生徒の満足度の差を χ^2 検定した結果、有意差が認められた（ $\chi^2(1)=148.75, p<.001, \phi=-.136$ ）。残差分析の

表8 目標の有無、生徒の属性、生徒の意見の反映度及びチームの勝利志向性と生徒の満足度との関係

標準偏回帰係数(β)	
目標 チーム目標の有無	.007
個人目標の有無	.103***
生徒の属性 学校種	.020
運動種目	.016
生徒の意見の反映度	.193***
チームの勝利志向性	.085***
R^2	.066***

*** $p<.001$

表9 個人目標の有無、達成計画、達成努力と生徒の満足度との関係

個人の目標		満足度	楽しい 度数（％）	苦しい 度数（％）	残差分析	χ^2 値 (df)
有 無	目標がある		6987(93.8％)	478(80.3％)	$\pm 12.2^{**}$	148.75*** (1)
	目標がない		463（6.2％）	117(19.7％)	$\pm 12.2^{**}$	
	不 明		0	3		
	合 計		7450（100％）	598（100％）		
達成計画	具体的な計画がある		2500(35.8％)	120(25.1％)	$\pm 4.7^{**}$	44.55*** (2)
	なんとなく計画はある		4062(58.1％)	298(62.3％)	$\pm 1.8^*$	
	計画はない		425（6.1％）	60(12.6％)	$\pm 5.6^{**}$	
	合 計		6987（100％）	478（100％）		
達成努力	十分に努力できている		1066(15.3％)	33（6.9％）	$\pm 5.0^{**}$	146.15*** (3)
	努力できている		5041(72.1％)	304(63.6％)	$\pm 4.1^{**}$	
	あまり努力していない		856(12.3％)	129(27.0％)	$\pm 9.3^{**}$	
	ほとんど努力していない		24（0.3％）	12（2.5％）	$\pm 6.7^{**}$	
	合 計		6987（100％）	478（100％）		

*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

結果、運動部活動が「楽しい」と回答した生徒は、「苦しい」と回答した生徒よりも、自分には「目標がある」と回答した生徒の割合が有意に高かった ($Z = \pm 12.2$, $p < .01$)。この結果から、運動部活動では明確な個人目標を設定している生徒は満足度が高いことが示された。

次に、個人目標の達成計画による生徒の満足度の差を χ^2 検定した結果、有意差が認められた ($\chi^2(2) = 44.55$, $p < .001$, Cramer's $V = .078$)。残差分析の結果、運動部活動が「楽しい」と回答した生徒は、「苦しい」と回答した生徒に比べ、個人目標の達成に向けた「具体的な計画がある」と回答した割合が有意に高かった ($Z = \pm 4.7$, $p < .01$)。反対に、「苦しい」と回答した生徒は、「なんとなく計画はある」($Z = \pm 1.8$, $p < .05$)、「計画はない」($Z = \pm 5.6$, $p < .01$) と回答した割合が有意に高かった。

さらに、個人目標の達成努力による生徒の満足度の差を χ^2 検定した結果、有意差が認められた ($\chi^2(3) = 146.15$, $p < .001$, Cramer's $V = .140$)。残差分析の結果、運動部活動が「楽しい」と回答した生徒は、「苦しい」と回答した生徒に比べ、個人目標の達成に向けて「十分に努力できている」($Z = \pm 5.0$, $p < .01$)、「努力できている」($Z = \pm 4.1$, $p < .01$) と回答した割合が有意に高かった。反対に、運動部活動が「苦しい」と回答した生徒は、「楽しい」と回答した生徒に比べ「あまり努力していない」($Z = \pm 9.3$, $p < .01$)、「ほとんど努力していない」($Z = \pm 6.7$, $p < .01$) と回答した割

合が有意に高かった。これらの結果から、個人目標の達成に向けて具体的な計画を立て、その達成に向けて努力ができている生徒は満足度が高いことが示唆された。

(3) チームの勝利志向性及び生徒の意見の反映度と生徒の満足度との関係

表10は、チームの勝利志向性と運動部活動に対する生徒の満足度との関係を分析したものである。チームの勝利志向性の違いによる生徒の満足度の差を χ^2 検定した結果、有意差が認められた ($\chi^2(3) = 103.80$, $p < .001$, Cramer's $V = .114$)。残差分析の結果、運動部活動が「楽しい」と回答した生徒は、「苦しい」と回答した生徒に比べ、自分のチームが「ある程度勝つことを中心に楽しむ」ことを目指していると回答した割合が有意に高かった ($Z = \pm 5.7$, $p < .01$)。この結果から、「ある程度勝つことを中心に楽しむ」生徒は満足度が高いことが示された。反対に、「苦しい」と回答した生徒は、「楽しい」と回答した生徒に比べ、「みんなで楽しむことを中心にできれば勝つ」($Z = \pm 5.0$, $p < .01$)、「とことん楽しむ」($Z = \pm 7.9$, $p < .01$) を目指している割合が有意に高かった。この結果から、運動部活動において、楽しむことを直接的に目指している生徒が必ずしも楽しめているとは限らず、チームで共通の目標達成に向けて活動することの難しさが示唆された。

表11は、生徒の意見の反映度と運動部活動に対する生徒の満足度との関係を分析したものである。反映度の違いによる生徒の満足度の差を χ^2

表10 チームの勝利志向性と生徒の満足度との関係

チームの勝利志向性 \ 満足度	楽しい 度数（％）	苦しい 度数（％）	残差分析	χ^2 値 (df)
徹底して勝つ	3652(49.0％)	299(50.2％)	±0.5	103.80*** (3)
ある程度勝つことを中心に楽しむ	3022(40.6％)	171(28.7％)	±5.7**	
みんなで楽しむことを中心にできれば勝つ	653（8.8％）	88(14.8％)	±5.0**	
とことん楽しむ	123（1.7％）	38（6.4％）	±7.9**	
不 明	0	2		
合 計	7450（100％）	598（100％）		

*** $p < .001$, ** $p < .01$

表11 生徒の意見の反映度と生徒の満足度との関係

満足度 生徒の意見の反映度	楽しい 度数（％）	苦しい 度数（％）	残差分析	χ^2 値 (df)
とても反映されている	1611(21.6％)	46（7.7％）	± 8.1**	408.06*** (3)
反映されている	4529(60.8％)	253(42.3％)	± 8.9**	
あまり反映されていない	1166(15.7％)	223(37.3％)	± 13.5**	
ほとんど反映されていない	143（1.9％）	76(12.7％)	± 15.7**	
不 明	1	0		
合 計	7450（100％）	598（100％）		

*** $p < .001$, ** $p < .01$

検定した結果、有意差が認められた ($\chi^2(3) = 408.06$, $p < .001$, Cramer's $V = .213$)。効果量の値から、生徒の満足度別にみた生徒の意見の反映度には弱い関連性がみられ、人数の偏りが確認された^{注5)}。残差分析の結果、運動部活動が「楽しい」と回答した生徒は、「苦しい」と回答した生徒に比べ、生徒の意見が「とても反映されている」($Z = \pm 8.1$, $p < .01$)、「反映されている」($Z = \pm 8.9$, $p < .01$)と回答した割合が有意に高かった。反対に、「苦しい」と回答した生徒は、「あまり反映されていない」($Z = \pm 13.5$, $p < .01$)、「ほとんど反映されていない」($Z = \pm 15.7$, $p < .01$)と回答した割合が有意に高かった。この結果から、運動部活動の取り組みにおいて自分たちの意見が反映されている生徒は満足度が高いことが明らかになった。

4. ま と め

本研究は、中学・高等学校の運動部541部に所属する8048名の生徒を対象に、運動種目別及び学校種別にみた運動部活動におけるチーム/個人の目標設定、チームの勝利志向性、生徒の意見の反映度、生徒の満足度それぞれに対する生徒の意識の実態並びにそれらが運動部活動に対する生徒の満足度に及ぼす影響を明らかにしようとした。その結果、以下の諸点が明らかになった。

1) チーム/個人の目標設定、チームの勝利志向性、生徒の意見の反映度、生徒の満足度の実態

- ①全体でみると、生徒の多くは生徒中心に決定したチーム目標があり、それをすべての生徒で共有していた。また、生徒の多くは個人目標があり、目標達成に向けて計画を立てて努力していた。さらに、生徒の多くはチームが勝利志向であると捉えていた。加えて、練習や試合において生徒の意見が反映されており、生徒の満足度は高かった。
- ②運動種目別にみると、集団種目の生徒の多くは生徒中心で決定したチーム目標があり、それをすべての生徒が共有していた。また彼らの多くは個人目標があり、その達成に向けて具体的な計画があった。さらに彼らの多くは勝利志向で、練習や試合において生徒の意見が反映されており、生徒の満足度が高かった。一方で、個人種目の生徒の中にはチーム目標を指導者中心で決定した生徒の割合が相対的に高かった。また、彼らの中には楽しみ志向の生徒の割合も相対的に高かった。さらに、彼らはチーム/個人の目標設定の割合が相対的に低かった。
- ③学校種別にみると、高校生の多くは指導者とすべての生徒で決定したチーム目標があり、それをすべての生徒が共有していた。また、彼らは徹底して勝つ意識が強く、練習や試合において生徒の意見がより反映されていた。一方で、中学生の多くはすべての生徒で決定したチーム目

標があり、ある程度勝利中心で楽しむことを目指す生徒の割合が相対的に高かった。

2) チーム/個人の目標設定、チームの勝利志向性、生徒の意見の反映度それぞれが生徒の満足度に及ぼす影響

- ①個人の目標があり、その達成に向けて具体的な計画を立て努力できている生徒の多くは満足度が高かった。
- ②ある程度勝つことを中心に楽しむ生徒は相対的に満足度が高かった一方で、楽しみ中心に取り組む生徒は相対的に満足度が低かった。
- ③自分たちの意見が反映されている生徒は相対的に満足度が高かったが、逆に反映されていない生徒は相対的に満足度が低かった。
- ④チーム目標は生徒中心で決定し、それをすべての生徒が共有することが生徒の満足度に繋がることが示唆された。

3) 今後の検討課題

本研究では、運動部活動に対する満足度を「楽しさ」という1つの側面で捉えて分析した。確かに、運動・スポーツに対する生徒の満足度を規定する主な要因が「楽しさ」であることは違いないが、それ以外にも多様な要因があると考えられる。実際に、生徒の満足度を従属変数、それ以外の測定項目を独立変数として重回帰分析を行った結果、生徒の満足度の決定係数は有意ではあったが比較的低い値であった。このことは、運動部活動に対する生徒の満足度を十分に説明できていないことを意味しており、今回設定した以外の要因が存在する可能性がある。その点は今後の検討課題である。

付記

本研究は、日本学術振興会科学研究費助成金(課題番号15K01570平成27年度 基盤研究(C))「生徒にとって望ましい運動部活動の指導の在り方に関する研究(研究代表者 深見英一郎)」の配分を受けて行われた。

注

注1) 個人種目には、主な競技形式が個人競技である陸上競技、バドミントン、テニス、ソフトテニス、剣道、柔道、水泳、卓球、体操競技の他、高等学校のみ弓道、空手道、ボクシング、レスリング、山岳(全国高等学校体育連盟の登録名は「登山」)が含まれる。一方で、集団種目には、主な競技形式がチームで対戦する団体競技であるサッカー、バスケットボール、バレーボール、ハンドボール、ソフトボール、野球(中学校は軟式野球)の他、高等学校のみラグビー(全国高等学校体育連盟の登録名は「ラグビーフットボール」)、新体操、ダンスが含まれる。このうち、新体操とダンスに関しては、仲間と調和のとれた動きをしたりチームで1つのテーマ作品を表現したりする点で、ここでは集団種目に分類した。

注2) 調査用紙は無記名式であったが、得られたデータは指導者にみられることを想定して回答されたものであるということを考慮すると、「楽しさ」や「意見の反映度」などは肯定的な回答が多めに出てきた可能性がある。

注3) 「満足度」とは学術的にも社会的にも多様な意味を持つ概念であり、「楽しい」という評価と「満足度」の高さは必ずしも完全に一致しない。しかし、徳永・橋本(1980)は、運動部活動の生徒は、運動・スポーツに対する満足度を規定する主要因が「楽しさ」であり、それに加えて「挑戦・達成」することであったと報告している。また石原(2012)は、運動部活動を通して得られるもののうち、何が生徒の満足度に影響を与えているかを分析した結果、満足度と高い相関がみられたのは「楽しさ」、「達成感」、「日常生活の充実感」であったと報告している。さらに高橋(2001)は、体育授業に対する総合的評価に対して最も強い規定力をもつのは「楽しさ」に代表される「意欲・関心」次元であり、体育授業の成否を決定づける要因であるといっても過言ではないと指摘している。

注4) 残差分析の有意性判定は、残差 $> \pm 1.65$ では $p < .10$ 、残差 $> \pm 1.96$ では $p < .05$ 、残差 $> \pm 2.58$ では $p < .01$ となっている(田中・山際, 2012)。

注5) 運動種目/学校種別にみたチーム/個人の目標設定、チームの勝利志向性、生徒の意見の反映度、生徒の満足度について、また生徒の満足度別にみた個人の目標設定、チームの勝利志向性、生徒の意見の反映度についてそれぞれ効果量を測定した。その結果、効果量の値から「運動種目別にみ

たチーム目標の有無（表3の一部）」と「生徒の満足度別にみた生徒の意見の反映度（表11）」それぞれの項目間に弱い関連性がみられ人数の偏りが確認された一方で、それ以外の項目間における差異は非常に小さな差であることが確認された。

注6) 文部省（1997）の調査では、練習や試合における生徒の意見の反映度について、中学生の75.4%、高校生の82.0%が（「とても反映されている」を含めて）反映されていると回答していた。

注7) 他方で、表8においてチーム目標の有無は、生徒の満足度に有意な正の影響は認められなかったが、チーム目標の決定者、共有状況及び生徒の属性を独立変数として設定し（従属変数は生徒の満足度）、再び重回帰分析（カテゴリカル回帰）を行った結果、表12に示したように目標の決定者及び目標の共有状況は生徒の満足度に影響を与えていることが明らかになった。特に、標準偏回帰係数 β 値からチーム目標を共有しているかどうか（ $\beta = .140, p < .001$ ）、チーム目標を誰が決定したか（ $\beta = .049, p < .001$ ）が生徒の満足度に対して重要な影響を与えていることが示された。

表12 チーム目標の決定者、共有状況及び生徒の属性と生徒の満足度との関係

		標準偏回帰係数(β)
目標	チーム目標の決定者	.049***
	チーム目標の共有状況	.140***
生徒の属性	学校種	.058***
	運動種目	.018
R ²		.032***

*** $p < .001$

文 献

- 朝日新聞（2016a）（フォーラム）中学校の部活動：1 活動時間。2016年4月17日朝刊。朝日新聞社。
- 朝日新聞（2016b）（フォーラム）中学校の部活動：2 教員。2016年4月24日朝刊。朝日新聞社。
- Danish, S.J., Petitpas, A.J., and Hale, B.D. (1993) Life development intervention for athletes: Life skills through sports. *The Counseling Psychologist*, 21; 352-385.
- 藤田雅文・吉田哲也（2010）中学校運動部顧問の管理行動に関する研究—競技経験との関連性—。鳴門教育大学研究紀要, 25: 347-352.
- 石原 剛（2012）運動部活動がもたらす効用の要因分析—愛媛県の高등학교を対象として—。2012年2月政策研究大学院大学 教育政策プログラム 修士論文。http://www3.grips.ac.jp/~education/wp/wp-content/uploads/2014/04/201101.pdf（参照日2015年12月30日）。
- 伊藤雅充（2013）より良い運動部活動のコーチングを目指して。SYNAPSE, 25: 24-27.
- Jean C. and Wade G. (2009) An integrative definition of coaching effectiveness and expertise. *International journal of sports science & coaching*, 4(3): 307-323.
- 勝田 隆（2000）知的コーチングのすすめ—頂点をめざす競技者育成の鍵。大修館書店。
- 倉藤利早・田島 誠・米谷正造（2011）指導者のリーダーシップのタイプが選手の自主性に及ぼす影響。川崎医療福祉学会誌, 20(2): 457-460.
- 桑野友裕・小原達朗・笹山龍太郎（2014）生徒指導の内容を踏まえた運動部活動指導の研究—自己指導能力を育む運動部活動指導—。長崎大学教育学部 教育実践総合センター紀要, 13: 221-230.
- 教育新聞（2011）社説「中学校の部活動 新学習指導要領による見直しを」2011年6月23日号。教育新聞社。
- 丸山仁志（2013）中学校部活動の自主性に関する研究—運動部における顧問教師と生徒の意識に着目して—。2013年度 びわこ成蹊スポーツ大学卒業研究抄録集。p. 103.
- 文部省（1997）平成9年12月 運動部活動の在り方に関する調査研究報告（中学生・高校生のスポーツ活動に関する調査研究協力者会議）。http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/sports/001/toushin/971201.htm（参照日2015年12月30日）
- 文部科学省（2002）運動部活動の実態に関する調査（平成13年）。http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo5/009/gijiroku/_icsFiles/afiedfile/2011/09/14/1310757_04.pdf（参照日2016年5月28日）
- 文部科学省（2012）部活動の意義と留意点等。スポーツ青少年局企画体育課編，中学校学習指導要領解説 保健体育編。東山書房，pp. 170-172.
- 文部科学省（2014）運動部活動の在り方に関する調査研究報告書—一人一人の生徒が輝く運動部活動を目指して—。平成25年5月27日 運動部活動の在り方に関する調査研究協力者会議。http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/jyujitsu/_icsFiles/afiedfile/2013/05/27/1335529_1.pdf（参照日2016年3月31日）
- 文部科学省（2015）地域スポーツに関する基礎データ

- 集（平成27年4月）．http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/sports/025/shiryo/_icsFiles/afldfile/2015/05/01/1357467_4.pdf（参照日2016年5月28日）
- 中澤篤史（2015）運動部活動の戦後と現在 なぜスポーツは学校体育に結び付けられるのか．青弓社．
- 西島 央（2006）部活動—その現状とこれからのあり方．学事出版，pp. 12-16.
- 西島 央（2013）「べき」や「はず」の学校教育にとられない部活動をめざして．体育科教育，61(3): 14-17.
- 岡沢祥訓（2001）メンタルを考えよう—卓球に学ぶスポーツ心理学．卓球王国．
- 佐藤正伸・長堂益丈（1995）競技者の競技意欲に対する指導者の影響．陸上競技研究，12: 34-43.
- 佐藤 豊（2013）学校運動部活動の教育的意義を再考する．現代スポーツ評論，28: 60-74.
- 制野俊弘（2013）自治集団活動としての運動部活動を構想する．体育科教育，61(3): 34-37.
- 田中 敏・山際勇一郎（2012）新訂ユーザーのための教育・心理統計と実験計画法．教育出版，p. 263.
- 高橋健夫（2001）体育授業を観察評価する．大修館書店，p. 13.
- 徳永幹雄・橋本公雄（1980）体育授業の「運動の楽しさ」に関する因子分析的研究．健康科学，2: 75-90.
- 友添秀則（2013）学校運動部の課題とは何か —混乱する学校運動部をめぐって．現代スポーツ評論，28: 8-18.
- 鶴山博之（2010）高校陸上競技部のリーダーシップに関する研究．富山国際大学子ども育成学部紀要，1: 53-62.
- 上野耕平（2006）運動部活動への参加による目標設定スキルの獲得と時間的展望の関係．体育学研究，51(1): 49-60.

（2016年1月5日受付）
（2016年7月19日受理）

Advance Publication by J-STAGE
Published online 2016/8/19